

Title	第一インターナショナル研究にかんする最近の動向
Sub Title	A short view on the study of the First International
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.12 (1966. 12) ,p.1467(103)- 1479(115)
JaLC DOI	10.14991/001.19661201-0103
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19661201-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

(21) 「人事漸く繁多にして身心の需用次第に増加するに至りて、世間に發明もあり工夫も起り、工商の事も忙はしく学問の道も多端にして、又昔日の単一に安んず可らず。戦闘、政治、古学、詩歌等も僅に人事の内の一箇条と為りて、独り権力を占るを得ず。千百の事業、竝に發生して共に其成長を競ひ、結局は此彼同等平均の有様に止りて、互に相迫り互に相推して、次第に人の品行を高尚の域に進めざるを得ず。是に於てか始て智力に全権を執り、以て文明の進歩を見る可きなり。都て人類の働は愈單一なれば其心愈専ならざるを得ず。其心愈専なれば其権力愈偏せざるを得ず。……今の西洋諸国の如きは正に是れ多事の世界と云ふ可きものなり。故に文明を進るの要は、勉めて人事を忙はしくして需用を繁多ならしめ、事物の軽重大小を問はず、多々益これを採用して益精神の働を活発ならしむるに在り。」(『文明論之概略』同全集第四卷23頁。)

(22) 「判断の絶対主義は政治的絶対主義と相伴う。」(丸山真男『福沢論吉の哲学——とくにその時事批判との関連——』「前掲『近代主義』72頁。)

研究ノート

第一インターナショナル研究にかんする最近の動向

飯田 鼎

一九六四年は、第一インターナショナル創立一〇〇年にあたり、運動の中心地、イギリスをはじめ、マルクス・エンゲルスの事業を記念するために絶大な努力を払ってきたソヴェートにおいては、学界や社会主義運動の分野で、活発に記念祭が行われたときといえる。しかし、わが国では、この一〇〇年祭は、あまり注意されずに終ってしまった。マルクス主義経済学や哲学の研究がこれほど盛んであり、その文献が、ほとんど細大洩らさず邦訳されているにもかかわらず、マルクスのこの面での活動は、それほど注目をひかなかったのは何故であろうか。

わたくしはいま、ひとりの知識人として、一〇〇年前のこの国際的な運動に格別の関心を抱いている。数年前から激化したヴェトナム戦争は、いまや中国大陸にさえ及ぼうとしている。一方におけるヴェトナム戦争と他方における中・ソ分裂(中ソ不團結などという、ごまかしの言葉を使用してはならない、それは本質を見失わせることで

第一インターナショナル研究にかんする最近の動向

しかない)は、私をして、第一インターナショナルのことを想い起させずにはおかない。中・ソの論争から両国の国家的利害の対立への発展、そしてさらに最近における両国間の敵対的行動に至る経過をみると、たんにイデオロギーの面での対立のみならず、その背後には民族問題がかくされている。同様に、ヴェトナム戦争の本質は、帝国主義的侵略戦争であり、社会主義国にたいする高度に発展した独占資本主義国の攻撃であると同時に、圧迫民族と被圧迫民族との闘いでもある。

第一インターナショナルの時代において、マルクスとエンゲルスが、そのために闘っていたところの重要な問題は、まさしく時代を超えて、現在もなお、未解決のままに残されているし、ある意味では、その根は深く、その規模はより大きくなりつつあるのではないだろうか。中・ソの、いまや敵対的な関係としか呼びえないような現在の深刻な事態を、マルクスとエンゲルスは予想しえたであろうか。わたくしはその意味において、第一インターナショナル研究の重要性を想うと同時に、わが国の研究者や運動家の間に、これにあ

一〇三 (二四六七)

まり関心がむけられていないのに一抹の淋しさを感ずるのである。そこで今回は、わが国においては、第一インターナショナルについての研究業績が皆無に近い状況に鑑み、ヨーロッパにおける第二次大戦後の研究について簡単な素描を試みることにしよう。

二

まず、イギリスの「労働運動史研究会」(Society for the Study of Labour History)は、一九六五年春の会報第一〇号に、その前年の一月に催された会議において、「インターナショナルについて」という題目の研究会を開いているので、その模様を紹介することにしよう。

この会議は、シェフィールド大学の教授で、わが国でも、そのすぐれた業績によって知られているシドニー・ポラード氏(Sidney Pollard)が議長をつとめ、まず、第一インターナショナルの研究者シモン・アブラムスキー(Simon Abramsky)の「マルクスと国際労働者協会(第一インターナショナル)の総務委員会」という報告が行われた。その要旨はつぎのようであった。

(一) 一八四八年の革命の失敗以後、イングランドで支配的であった労働運動は、一八五九年に、建築業のストライキによって復活しはじめた。これはたかさんの新しい指導者を、労働組合にもたらすことになった。

(二) それにつづいて、一八六二年にアメリカに南北戦争がおこり、ツァーリズムの抑圧にたいする一八六三年のポーランドの

叛乱、そして最後に、一八六四年、英国ではガリバルディ歓迎がおこなわれた。これらの国際的な問題は、労働者階級の広大な共感をよびおこしたのである。そして同時に、労働組合会議(The Trades Union Congress)の先駆者であるところのロンドン労働組合評議会(The London Trades Council)が組織された。一八六二年、イギリスの労働者階級は、チャーティストの時代以来はじめて、それ自身の新聞、すなわち、「ザ・ビーハイヴ」を獲得した。

(三) 同時に、異なっているが、復興の兆候がフランスおよびドイツにもまたおこってきた。ブルードンのフランスの追随者たちは、「六〇人宣言」を出し、彼らが選挙に入る用意があることを宣言した。またラッサール(Ferdinand Lassalle)は、一八六三年五月、「全ドイツ労働者同盟」(Allgemeine Deutsche Arbeiterverein)を企画し、それはのちに一八六八年に建設されたドイツ社会民主党の先駆者となったのであった。

(四) 若い労働組合の指導者は、ポーランドのために集会を組織し、またジョージ・オッジア(George Odger)は、ロンドン労働組合評議会の指導者として、ポーランドの正義に同情するため、パリの労働者に感謝の挨拶を起草した。この挨拶こそは、第一インターナショナルの出発点であった。

(五) マルクスは、この当時孤立した存在であり、イギリスの労働者どころか大陸の労働者からも孤立していた。彼は、最後の瞬間に、インターナショナルの創立大会に出席するように招待さ

れたのであって、たんなるオブザーバーとして出席したにとどまるのである。とはいえ、その大会の終りに、彼は総務委員会に選挙されたのである。マルクスは、この新しい組織の規約の起草を行うべき準備委員会に協力した。オーエン主義者ジョン・ウェストン(John Weston)、フランスの共和主義者ル・ユベ(Leube)およびイタリアのマツツイニの追随者ルイジー・ウォルフ(L. Wolf)によって起草された最初の案は拒否された。そこでマルクスは、一八四五年から六四年までのヨーロッパにおける労働者階級の前進に関連して、創立宣言を提示することに成功したのであって、それによれば、彼は、一方におけるイギリスの富の蓄積と他方における労働者の貧困化との間の対比を明らかにした。

(六) インターナショナルの政策的指導的な団体としての総務委員会、その一員となったマルクスは、最初、ドイツ担当通信書記という控え目な役割を演じたのであるが、のちに活動的な指導者となる。そしてさまざまな流派の政策の調整に苦心を払う。

(七) マルクスは最初、総務委員会のヨーロッパのメンバーの支持をえたのち、イギリスの労働組合主義者の支持をえた。一八六七年までインターナショナルは、イギリスにおいて発展、五〇、〇〇〇人以上の参加をみる。それ以後、会員数の獲得は停滞したが、影響力は増大した。

(八) 一八七〇年、マルクスのフランス・プロイセン戦争についての第一宣言——マルクスはここで、フランスにたいするプロイ

センの勝利は、フランスをして、ロシアとの同盟にみちびくであらうという重要な示唆をしたが、それは一八九〇年代に現実となった。

(九) プルードン主義者にたいする忍耐強い闘い。一八六八年のブリュッセル大会において彼らを敗ったが、この闘いにおいて、イギリスの総務委員の支持を獲得。

(十) プルードン主義の克服後、バクニンおよびその追随者との闘争、ハーグ大会における苦しい勝利、この闘いは、インターナショナルを根底から揺がす。

(十一) パリ・コンミュニョンの影響、「フランスにおける内乱」のインターナショナルにたいする衝撃、オッジアを先頭とするイギリスの総務委員の辞任。

(十二) コンミュニョンの崩壊と、ロンドンへの亡命者の増大、フランスにおけるインターナショナルの弱体化、バクニンとの闘争の一層の激化、インターナショナルをバクニン派からまもるために、ハーグ大会において、その本部のニューヨーク移転の決議に成功、インターナショナルの静かな死。第二インターナショナルへの影響。

以上のように、アブラムスキーは、コリンズとの最近の共著「マルクスとイギリス労働運動」(Ch. Abramsky and Henry Collins; Karl Marx and the British Labour Movement, Years of the First International, 1965, London)において展開した論旨を発表したが、これはとくに歴史的叙述的であったため、つぎのような痛烈な批判

が加えられたことを記している。すなわち、シューター (Schueter) の意見によれば、

「この報告は概念構成が弱いことが問題である、として、『共産党宣言』と『創立宣言』との差異を反映している二分法である点を強調した」。

これにたいして、報告者アブラムスキーは、二分法は根拠がないとして、マルクスは「宣言」と「創立宣言」との間における一貫性を固守するために、一方において、協同組合運動を再評価し、ブルードン主義者にたいする打撃として十時間法を、バクーニン主義者にたいして、「フランスにおける内乱」において、「統一的政府」(centralised government)を強調したことを明らかにしたのである。

ハリソン (R. Harrison) の質問もまた、「共産党宣言」と「創立宣言」との関連について、つぎのような興味深い質問を放ったのである。すなわち、

「『宣言』では、労働者は、資本主義社会においては、彼らの現在の地位を強化したり、あるいは拡大することを求めないとして、いるのに、『創立宣言』においては、『労働の経済学』の『資本の経済学』にたいする勝利にふれ、十時間法によって労働者がうける肉体的・智的および道徳的な利益にふれているのはどういう意味か」。

またモルナル (Molnar) は、つぎのようにのべた。

「マルクス、バクーニンおよびコムニオンに、もう少し注意が与えられるべきである。マルクスは、コムニオンがあらわれた

とき、一時的ではあったが、その見解を変えたのだ」。

これにたいしてコリンズは、ハリソンの質問にたいして、マルクスの意図は、明らかに戦術的であると述べたのである。またハリソンは、つぎのようにのべている。

「『宣言』においては、労働運動の前進は、組織上の進歩にかんして考慮されたのであって、それが現在社会にたいしてなした侵蝕にかんしてではないというのである」。

以上のような討論の過程のなかで、報告者や討論者の問題意識のなかに、「民族問題」、とくにポーランド問題が浮び上ってこない点が重要である。第一インターナショナル百年を迎えて、この「民族」の問題こそ、もっとも強く意識されてよいのではなからうか。

つぎに、報告は掲載されていないが、「イギリス労働運動とインターナショナル」というコリンズの報告についての討論の様相がのせられている。やはり、重要な論点を含んでいるので簡単に紹介しよう。

(モルナル) マルクスは、同胞民主協会が、ブリュッセルの民主協会の支部であったと述べているが、これは正しかったか？

(コリンズ) それらは相互に通信し合っただけであり、同じ組織の部分ではなかった。

(モルナル) マルクスがイギリス連盟 (British Federation) をうけ入れたのは、たんに自暴自棄の行為ではなかった。それは少くとも、インターナショナルにたいするイギリス労働組合の加入という点においては、一八六八年以後の衰勢にたいする反応であ

り、インターナショナルにたいして、それを固く保持しようとする計画であった。

(コリンズ) ポストゲイトの労働組合加入の数字は疑わしいと思ふ……。

(ハリソン) ポーランド蜂起を支援するための行動は、コリンズが示唆したように、純粋に労働者階級の運動というわけではなかった。たとえば、コワン (Cowan)、スタンスフェルト (Stanfeld)、ピールズ (Beals)、ビーズリー (Beesly)、ハリソン (F. Harrison) らが加わった。

(コリンズ) インターナショナルは、ロンドンの運動であった。そしてコワンのような人は、ロンドンではほとんど影響力をもっていなかった。ピールズは孤立した人物であった。一般的にいうならば、ポーランドは、労働者階級とジョン・ブライトら急進主義者との間の鎖を破った。イタリアとアメリカ南北戦争については彼らは意見が一致していたが、ブライトはポーランドにたいする干渉に反対する一方、クリーマーは、パーマストンをして、ロシア宣戦を布告させようとした。

(ハリソン) もし、労働組合運動が、インターナショナルの形成にとって、それほど根本的であるならば、何故に創立宣言において、それが強調されなかったのか？ たしかにインターナショナルは、労働組合運動をも超えたより広い階級の運動から現われたものであった。インターナショナルは、一八六七年以後では結成されなかった。そのときまで、資本主義国家内部における政

第一インターナショナル研究にかんする最近の動向

治権力の問題について、非常に多くの進歩が行われたのである。

(コリンズ) ……マルクスは、「創立宣言」のなかで、労働組合を軽視したが、協同組合運動や十時間法運動には好意的であった。労働者をジョン・ブライトの急進主義から分裂させたものはこれであった——協同組合は、資本からの解放を意味し、十時間法は市場の操作を統制しようとする政治的な介入の例であったが、このようなものとしての労働組合は、必ずしもこれらの意味するところのいづれをも満たすものではなかった。マルクスの労働組合にたいする専心は、のちの、すなわち、一八六六年以後の現象であって、それまでは、事実上重要なものであると考えられていたにすぎなかった。

(アブラムスキー) マルクスは、イギリス連合協議会 (English Federal Council) から、あたかもかつて彼がブルードンに反対するために、イギリスの労働者を利用することができたように、バクーニンに反対する支援をうることを期待したのである。

(コリンズ) わたくしは、アブラムスキーの意見は、疑わしいものと考ええる。証拠がないからだ。しかしながら、もしこれが彼の意志であったとすれば、彼は、おそろしい誤を犯したことになる。なぜならそれは、ジョン・ヘイルズとの衝突をどうしようもないほどはげしくさせ、かくしてマルクスがインターナショナルを葬る決心をさせたからである。

この討論は、なかなか興味深い結果に終わっているではないか。はつきりした結論はえられていないけれども、問題点としては、(一)イ

ンターナショナルとイギリス労働組合運動との関連、とくにこの運動の初期段階(一八六七年以前)におけるマルクスの労働組合観と、それ以後との間に差異があることが強調されていることが問題である。(二)ここでポーランド問題についての討論が展開されているが、ポーランド問題が、労働者階級とブルジョア・ラディカルのジョン・ブライトとの間のつながりを破壊したとコリンズがのべているのは納得しがたい。なぜなら、この問題にかんして、両者が異なった見解をもつことは十分ありうるし、インターナショナルの運動のなかに、ブルジョア急進主義の役割を高く評価することも正しくないと思ふからである。

以上のように、「イギリス労働運動とインターナショナルとの関係」についての報告ならびに討論とならんで、サセックス大学教授モーガン (R. Morgan) の、「ドイツにおけるインターナショナルの事業」という報告およびその討論がおこなわれた。そこでこれについて、つぎに簡単に紹介しておくことにしよう。

モーガンは、最近、「第一インターナショナルとドイツ社会民主主義者」という著作を発表して注目をあびた人であるが、この報告は、この労作の内容の要点を紹介したもののようである。彼はまず、一八六九年、アイゼナツハ大会と社会民主党の建設から出発する。この事件の前提として、つぎの四つの事項を提示している。

- (一) 産業革命(ドイツにおける)のいちじるしい発展とともに、政治的・社会的諸条件における影響の増大、そして一八五六年以来、すべての階級をして、その階級的立場を決定させた革命的

となり、北ドイツ議会での活動を指導するとともに、バーベルの率いる労働者教育協会全国連盟をして、インターナショナルにもとづく綱領を採択させようと努力した。一八六八年のニュールンベルク大会において採択、軍国主義反対の決議。労働組合の発展と全国的統一運動との関係、ザクセンにおけるインターナショナルの発展。第三段階においては、一八六八年ハンブルク大会におけるラッサール党の分裂、シュウアイツアのインターナショナルへの加入、リープクネヒトおよびバーベルとの競合関係の激化。

以上のような報告要旨にたいして、報告者モーガンは、つぎのように問題を限定しているが、これはなかなか優れた問題提起であると思ふ。

- (a) ラインランド、とくに主要な地方の指導者の間における一八四八年の革命および共産主義的伝統。しかし、マルクスは、ほとんど忘れられていた。
- (b) ADAVと労働者教育協会全国連盟との関係——前者の社会主義的・プロイセン的傾向、後者の反プロイセン・自由主義。
- (c) リープクネヒトの大ドイツ主義IIマルクス主義にたいする無関心II民主的・反プロイセン的・反軍国主義的ドイツ。
- (d) その結果としてのアイゼナツハ派にたいするマルクス、エンゲルスの不信、ADAVにたいする彼らの評価。
- (e) ラッサールとマルクスの混合としてのアイゼナツハ綱領、(i) 一八七〇年以後、土地国有にかんするパーゼル宣言の採択、(ii) インターナショナルにたいする不協力、出金拒否、(iii) インター

第一インターナショナル研究にかんする最近の動向

状勢の到来。

- (一) 一八六〇年代にはまったく忘れ去られたとはいえ、共産主義者同盟 (Communist League) の伝統。
- (二) ラッサールによって、一八六三年に建設された「全ドイツ労働者同盟」(Allgemeine Deutsche Arbeiterverein)——精神においてインターナショナルであるよりは、むしろプロイセン的——と、これに対し自由主義的ライヴァルとして、一八六三年六月に建設された「労働者教育協会全国連盟」(National Federation of Workers' Education Clubs) との間の競合関係。

(四) 労働者をして、マルクスおよびエンゲルスの多かれ少なかれ意識的な支持者たらしめようとする、マルクスおよびその援助者の福音主義的な活動。

このような前提に立って、モーガンは、ドイツにおける第一インターナショナルの発展の主要な段階を、(一)一八六四年一六五年、(二)一八六六年一六八年および(三)一八六八年の春から一八六九年の三段階にわたる。第一段階における重要な指標は、マルクスとエンゲルスによるラッサールのADAVをして、新聞「ソーシアル・デモクラット」を通じて、インターナショナルに近づけようとする努力、その過程でW・リープクネヒトおよびJ・P・ベッカーの助力を得た。「ソーシアル・デモクラット」との訣別、ベッカーのスイスにおける「フォルボルテ」(Die Vorboten)による第一インターナショナルのドイツにおける宣伝。

第二期、一八六七年、リープクネヒトとバーベルとの接触が密接

ナショナル支部の設立にたいする熱意の不足。

- (f) インターナショナル崩壊にかんするドイツ社会民主党の責任、国際的問題よりも、国内問題に終始。

以上のような、きわめて興味ある問題点が出されたのであるが、これにたいして、どのような討論がおこなわれたのであろうか。つぎに討論について簡単に紹介してみよう。

(ア) プラムスキー 今日、東ドイツでは、リープクネヒトとバーベルとをマルクス主義者として押しあげる傾向がある。しかしながら、一八六七年当時、ベルリンの「共産党宣言」の出版者は、非常に不運であったし、エンゲルスは、他に誰もひきうけてくれなかったもので、くり返して、「宣言」を紹介しなければならなかったほどである。と同様に、ブリュッセル会議においては、モーゼス・ヘスが、一八四〇年代の線に沿って、マルクスの当時の反ブルドンの路線をうちだしたのに、ドイツの代表は誰一人としてこれを支持しなかった。まことに、ラッサールの党の方が、はるかに多く書き、労働者階級により大きな影響を与えたのである。

(モーガン) ラッサール派の人々は、主として工業労働者階級であり、反ブルジョアであった。しかしシュウアイツアは、「資本論」について好意的な批評を行なっているのである。

この両者の意見は、インターナショナルの研究者の間でしばしば問題となるところの事実であり、ラッサール派の方が、第一インターナショナルの歴史を通じて、終始、マルクス主義に積極的な姿勢を

とり、アイゼナツハ派は、西南ドイツの自由主義の影響のもとに、むしろ消極的な態度を脱しきれなかったという点である。当然のことながら、この対比の背後には、両者の階級的基盤の差異が見出されるであろう。

(アブラムスキー) ジュネーブ大会において、ベッカーは、プルードン¹を遠ざけたくないためか、ポーランド政策について中道を擁護した。これは、ドイツ人として、彼がポーランドの独立に反対だったからであろうか。

(モーガン) 彼は、日より見のな考えをしていいたのではないかと思う。というのは、彼は、あらゆる進歩的な運動にたいして、見さかぬ好意的であったし、マルクスと、ラッサールおよびバクーニンをも結びつけようと試みたからである。

(アブラムスキー) ヤコビでさえ、彼は、社会主義者ではなく急進主義者であったけれども、リープクネヒトよりは、もっとマルクスに近い立場をとった。そしておそらく、リープクネヒトにたいするマルクスの支持は、つぎのような事実によつていたのである。すなわち、マルクスは、他の反ラッサール派を見出しえなかったためであり、彼のほかに、インターナショナルの理想を促進するのに、いやしくも関心をもった人は誰もいなかったからである。

リープクネヒトにたいするこの評価はなかなか面白い。ドイツ社会民主党にたいするマルクスとエンゲルスの危惧は、まことにここから生じたものであると思う。

(モーガン) ヤコビは、反戦の基盤の上に立って、アイゼナツハ派に加わったのだ。しかし彼は、インターナショナルのメンバーではなかった。

(ホップスバウム) ザクセンは、工業化され、ラッサール主義者にとつては、希望もてる領域であったはずだ。

(モーガン) ライプツィヒとドレスデンは、ザクセンにおいて、ラッサール派が勢力であった唯一の地域である。そしてここではリープクネヒトが妨害されたのである。そしてペーベルが、一八六七年に立候補したとき、彼は、工業都市ケムニッツではなくして、田園地帯を地盤にして立ったのである。

(ホップスバウム) 一八七一年、ビスマルクおよびボイストの、社会主義にたいする恐怖は、パリ・コミューンが原因であったか？

(モーガン) ビスマルクは、リープクネヒトとペーベルの、議会における反戦宣言以来、「赤の危機」に悩まされていた。一八七一年以来、ドイツにはストライキの波がたかまり、ビスマルクは、これをインターナショナルの所業としていた。

(ポラード) 労働組合についてであるが、一八六八年のストライキが、シュウアイツァをしてインターナショナルの方へ向かわせるという事実がなかったかどうか。

(モーガン) 一八六八年に、労働組合運動は非常に分裂しており、未発達であった。すなわち、ラッサール派の労働組合があり、同時に設立された自由主義的組合と、更に、ペーベルやリープ

ルクスの発言は、おそらくドイツ社会民主党にたいする警告としてうけとるべきであろう。

以上において、一九六四年、労働運動史研究会の例会における、第一インターナショナル百年記念の報告および討論の様子をややくわしく紹介したが、これには、イギリスにおけるこの問題にかんする第一級の研究者が発言しているところから、これを通じて読者は、イギリスにおける第一インターナショナルの研究動向について簡単に理解することができるであろう。つぎに、第一インターナショナルにかんする最近の文献について、列挙することにする。

三

つぎに掲げる文献は、アブラムスキーが、労働運動史会報 (Society for the Study of Labour History, Bulletin No. 9, Autumn, 1964.) に掲載した「一九四五年以来の第一インターナショナル文献概観」と同じく、No. 11, Autumn, 1965. の中に収められた A. M. Johnstone の「補遺」を整理して作成したものである。但し、マルクス・エンゲルスのこれにかんする著作は、これを除く。

(a) 文献解題的著作

* La Première Internationale, 1864—1877, Vol. 1, edited by G. Del Bo, Paris, 1958.

* La Première Internationale, Imprimés 1864—1876, Actes officiels du Général et des Congrès et Conférence de l'Association Internationale des Travailleurs, edited by G. Del Bo, Paris.

クネヒトによって運営された「インターナショナル」の組合があった。各組合の大会が、どれくらい多くのメンバーを代表していたかはわからないけれども、それらの勢力というものを確定することは不可能であった。しかしながら、一一八名のニューリンベルクの代議員は、一四、〇〇〇名を代表することを要求したし、アイゼナツハ派の代議員は五〇、〇〇〇名を代表していると称した。「フォールボータ」(Die Vorboten) は、約五〇〇部の読者(但しスイスおよびオーストリアを含めて)をもっていたし、「ソーシアル・デモクラット」はより大きな発行高であった。一八六五年、ラッサール党は、約四、〇〇〇名の会員をもっていると主張しており、且つ一八七八年までに社会民主党は、五〇万票を得た。一般にいえば、労働組合は、この時期においては政党の附属物であり、イギリスにおけるほど重要なものではなかった。

(書記) それでは、何よりもまず、政党が労働組合を創り出したというのは真実か？

(モーガン) そのように思う。労働組合は、一八六八年まで非合法であった。そしてそのときまで政党は比較的強かったのだ。

(書記) マルクスが、一八六八年に確かにハンマン (Hamman) ともったといわれる会見の確実性とは何であったか。そのなかで彼は、政党が労働組合に肩代りすることは好ましくないとはいったといわれるが？

(アブラムスキー) おそらくそれは真実であらうと思う。

この最後の討論にみられる政党と労働組合との関係についての

第一インターナショナル研究にかんする最近の動向

1961.

- * La Première Internationale, Imprimés 1864—1876, Actes Officiels des Fédération et Sections Nationales de l'Association Internationale des Travailleurs, edited by G. Del Bo, Paris, 1963, pp. xx, 224.
- * G. Del Bo, *La Commune di Parigi, A bibliography*, Milan, Feltrinelli, 1967, pp. vi, 142.
- * Bert Andreas, *Bibliography on Communist Manifesto*, Milan, Feltrinelli, 1963.
- * Gianni Bosio, *La diffusione degli scritti di Marx e di Engels in Italia dal 1871 al 1892*, in *Società*, Vol. VII, Rome, 1951, pp. 1—53.
- * Gian Maria Bravo, *Marx e Engels in lingua italiana 1848—1960*, Rome, Avanti 1962, pp. 175.
- * C. Chambellant, *Aperçu des fonds de l'Institut français d'Histoire Sociale, Part II, La Première Internationale*, in *Le Mouvement Social*, Paris, No. 37, Oct-Dec., 1961, pp. 93—94.
- * Georges Haupt, *Note sur les archives de la Première Internationale réunies par le B.S. I.*, in *op. cit.*, No. 44, June-Sept., 1963, pp. 83—91, and No. 48, July-Sept., 1964, pp. 87—94.
- * J. Rougerie and G. Haupt, *Bibliographie de la Commune de 1871*, in *op. cit.*, Nos. 37 and 38, 1961—1962.
- * Maximilien Rubel, *Bibliographie de la Première Internationale* 1964, pp. 952.
- ㊦ “くへん・くへん”
- * Michael Bakounine et l'Italie 1871—72, edited by Arthur Lehning, *Première Partie, La Polemique avec Mazzini*, Leiden, E.J. Brill, 1961, pp. lvi, 352.
- * Michael Bakounin, *Marxism, Freedom and the State*, translated and edited by K.J. Kenafk, London, Freedom Press, 1950, pp. 63.
- * *The Political Philosophy of Bakunin*, Compiled and edited by G.P. Maximoff, Glencoe, The Free Press, 1953, pp. 434.
- * *Discours de Bakounine au Congrès de Bâle (1869) sur le droit d'héritage. Études de Marrologie*, (Serie S, No. 8) pp. 213—224.
- ㊦ 主要著
- * Isaiah Berlin, *Karl Marx, Third edition*, London, Oxford Univ. Press, 1963, pp. 295.
- * Samuel Bernstein, *Essays in Political and Intellectual History*, New York, Paine-whitman, 1955, pp. 224.
- * Samuel Bernstein, *The International in America*, New York, 1962.
- * W. Blumenberg, *Marx-in selbst-zeugnissen und Bilddokumenten*, Hamburg, 1962, pp. 176.
- * Julius Braunthal, *Die Stärke der ersten Internationale-Legende* 1962.
- 第一インターナショナル研究にかんする最近の動向
- in *Cahiers de l'Institut de Science Economique Appliquée, Études de Marxologie (Serie S, No. 8)*, Paris, August, 1964, pp. 249—275.
- ㊦ 総論
- * *Documents of the First International, 1864—1866*. The General Council of the First International, 1864—1866. The London Conference 1865. Minutes. Moscow, 1962, pp. 483.
- * *La Première Internationale* edited by Jacques Freymond, Henri Burgein, Kurt Langfeldt and Miplos Molnar, 2 Vols. Geneva, Librairie E. Droz, 1962, pp. xxxiii, 454, 500.
- * *The First International. Minutes of the Hague Congress of 1872* with related documents. Edited and translated by Hans Gerth, Madison, Univ. of Wisconsin Press, 1958, pp. xx, 315.
- * *Papers of the General Council of the International Working Men's Association*, New York, 1872—1878. Edited by Samuel Bernstein, Milan Feltrinelli, 1961, pp. 153.
- * *Der Vorbote, Politische und Sozial-ökonomische Zeitschrift. Zentralorgan der Sektionsgruppe deutsche Sprache der Internationalen Arbeiter Association*. Edited by Johann Philipp Becker, 1866—1871, reprinted in Berlin, Dietz, 1964 in 3 Vols.
- * *Documents of the First International, 1866—1868*, Minutes, Moscow, 1964, pp. 444.
- * *Die I. Internationale in Deutschland (1864—1872)*, Berlin, und Wirklichkeit, I.R.S.H.
- * *Ibid.*, *Geschichte der Internationale*, Vol. 1, Hannover, J. H. W. Dietz.
- * G.D.H. Cole, *History of Social Thought*, Vol. 2, London, Macmillan, 1954.
- * Royden Harrison, E.S. Beesley and Karl Marx, I.R.S.H., 1959, pp. 22—58, 208—238.
- * *Ibid.*, *British Labour and the Confederacy*, I.R.S.H., 1957, pp. 78—105.
- * *Ibid.*, *The British Working Class and the General Election of 1868*, I.R.S.H., 1960, pp. 1—68.
- * Helmut Hirsch, *Denker und Kämpfer*, Frankfurt a. Main, 1955, pp. viii, 188, pp. 123—144.
- * Michael Howard, *The Franco-Prussian War*, London, Rupert Hart-Davis, 1961, pp. xvi, 512.
- * Fr. de Jong, *Amsterdam Meetings of the First International in 1872*, I.R.S.H., 1951, No. 1, pp. 1—15.
- * K.J. Kenafk, *Michael Bakounin and Karl Marx*, Melbourne, 1948, pp. 384.
- * Heinrich Köchlin, *Die Pariser Commune i Bewusstsein ihrer Anhänger*, Mulhouse, *Freiheit Autoutät* 1950, pp. 248.
- * I. M. Kriwogus and S. M. Stezkewitsch, *Abriß der Geschichte der I und II Internationale*, Berlin, Dietz, 1960, pp. 311.

- * Horst Lademacher, Zu den Anfängen der deutschen Sozialdemokratie, 1863—1878, I. R. S. H. 1959, pp. 239—260, 367—393.
- * George Lichteim, Marxism. An Historical and Critical Study. London, Routledge 1961, pp. xx, 412.
- * Casimir Marti, Le socialisme et le mouvement a Barcelone a la chute d'Isabelle II, I. R. S. H.
- * Marx on Bakunin, A neglected text, edited by Henry Mayer in *Études de Marxologie*, edited by M. Rubel, October, 1959, pp. 99—117.
- * Miklós Molnár, Le declin de la Première Internationale. La Conférence de Londres de 1871.
- * Boris Nicolayevski, Towards a History of "The Communist League" 1847—1852, I. R. S. H., Vol. 1, 1956, pp. 234—252.
- * Günther Nollau, Die Internationale, Wurzeln und Erscheinungsformen des proletarischen Internationalismus, Cologne-Berlin, 1959, pp. 414.
- * Henry Collins and Chimen Abramsky, Karl Marx and the British Labour Movement, London, 1965, pp. xi, 356.
- * Aus der Geschichte des Kampfes von Marx und Engels für die proletarische Partei. Edited by I. S. Galkin, Berlin, 1961, pp. 695.
- * L'Apport de la Première Internationale au Mouvement Ouvrier, 1864—1964, in *Démocratie Nouvelle*, Paris, February, 1965, pp. 65—84.
- * Beiträge zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung, Sonderheft zum 100. Jahrestag der Gründung der I. Internationale, Berlin, 1964, pp. 189.
- * Jean Bruhat, Jean Dautry, Emile Tersen etc., La Commune de 1871, Paris, 1960, pp. 435.
- * J. Dautry and L. Scheler, Le Comité Central Républicain des vingt arrondissements de Paris, Paris, 1960, pp. 269.
- * Edouard Dolléans, Histoire du mouvement ouvrier, Tome 1, 1830—1871, Paris, 1948, pp. 387.
- * Edouard Dolléans and Michel Crozier, Mouvements ouvrier et socialistes. Chronologie et bibliographie. Angleterre, France, Allemagne, États-Unis (1750—1918). Paris, 1950, pp. xvi, 383.
- * Jacques Duclos, A l'Assaut du Ciel, Paris, 1961.
- * Aimé Dupuy, 1870—1871, La Guerre, La Commune et La Presse, Paris, 1959, pp. 255.
- * R. Palme Dutt, The Internationale, London, 1964, pp. 418.
- * Cahiers de l'Institut de Science Économique Appliquée, Études de Marxologie (Serie S. No. 8), Paris, August 1964.
- * Roger Garaudy, Les Sources Française du socialisme scientifique, Paris, 1949, pp. 284.
- * Grundriss der Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung, Berlin, 1963, pp. 304.

- * Günter Grütznér, Die Pariser Kommune, Macht und Karriere einer politischen Legende, Cologne, 1963, pp. xv, 279.
- * Emile Halévy, Histoire du Socialisme, Paris, 1946.
- * Royden Harrison, Before the Socialists: Studies in Labour and Politics, 1861—1881, London, 1965, pp. xiii, 369.
- * Ibid., The British Labour Movement and the International in 1864, in *The Socialist Register—1964*, London, 1964, pp. 293—388.
- * Heinz Hümmeler, Opposition gegen Lassalle, Berlin, 1963, pp. 244.
- * H. Lefebvre, La Commune, in *Arguments*, Paris, No. 27/28, 1962.
- * John Lewis, The Life and Teaching of Karl Marx, London, 1965, pp. 286.
- * J. Maitron and G. M. Thomas, L'Internationale et la Commune à Brest, in *Le Mouvement Social*, Paris, No. 41, 1962, pp. 46—73.
- * Roger Morgan, The German Social Democrats and the First International, Cambridge, 1965, pp. 280.
- * Günther Nollau, International Communism and World Revolution: History and Methods, London, 1961, pp. xv, 357.
- * Pariskaya Kommuna 1871, Vol. 2, Moscow, 1961, pp. 602.
- * J. Plamenatz, The Revolutionary Movement in France, 1815—1871, London, 1952, pp. xiv, 184.
- * Charles Rihis, La Commune de Paris; sa structure et ses doctrines, Geneva, 1955, p. 317.
- * Werner Wippold, Die Pariser Kommune; Ihre Bedeutung für die Entwicklung der Lehre von der Diktatur des Proletariat, Berlin, 1961, pp. 127.